

西表租納方言における音対応と音変化

大野, 眞男

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

13

(開始ページ / Start Page)

91

(終了ページ / End Page)

105

(発行年 / Year)

1988-11-30

(URL)

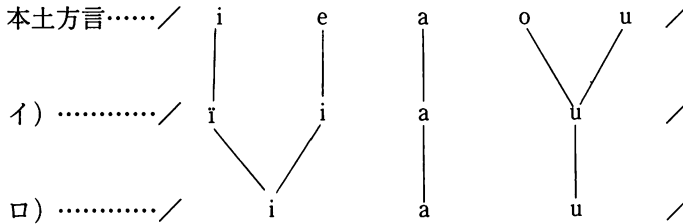
<https://doi.org/10.15002/00012644>

西表租納方言における音対応と音変化

大野 眞 男

1. 西表租納方言の位置づけ

西表租納方言を含めて宮古・八重山・与那国など先島方言全般における本土方言との母音音素の対応は次のようにまとめることができる。



本土方言が5母音を基調とする母音体系を持つのに対して、宮古方言・八重山方言の大部分では4母音を基調とするイ)の母音体系が主流となっている。これに対して、八重山方言の一部・与那国方言では3母音を基調とする口)の母音体系がみられる。これらは一般的に、一つの母音/i/から二つの母音/i・i/へと歴史的に分化していく条件が見いだされないことから、イ)の4母音体系を母胎として口)の3母音体系が生成したと考えられる。このように中舌母音/i/が漸層的に失われていく過程は、次の先島諸方言の中舌母音拍 Ciの分布・比較表によって窺い知ることができる^{注1)}。

<宮古>

多良間	i	gi	ki	zi	ci	si	—	—	vi	fi	bi	pi	mi
与那覇	i	gi	ki	zi	ci	si	—	—	—	—	bi	pi	mi
友利	i	gi	ki	zi	ci	si	—	—	—	—	bi	pi	mi
平良	i	gi	ki	zi	ci	si	—	—	—	—	bi	pi	—
大神	i	gi	ki	—	—	si	—	—	—	—	—	pi	mi
長浜	i	—	—	zi	ci	si	—	—	—	—	bi	pi	mi
池間	i	—	—	zi	ci	si	—	—	—	—	—	pi	—

<八重山>

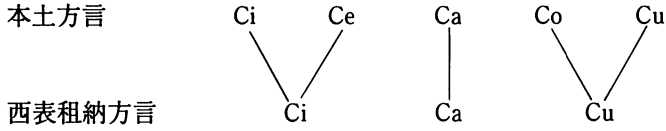
波照間	i	gi	ki	zi	ci	si	ri	—	—	—	bi	pi	—
石垣	—	gi	ki	zi	ci	si	ri	—	—	—	bi	pi	mi
小浜	—	—	ki	zi	ci	si	ri	ni	—	—	bi	pi	—
竹富	—	—	—	zi	ci	—	—	—	—	—	—	—	—
大浜	—	—	—	—	ci	si	—	—	—	—	—	—	—
黒島	—	—	—	—	—	si	ri	—	—	—	—	—	—
鳩間	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
西表租納	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

<与那国>

租納	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

本論で対象とする西表租納方言は、鳩間や与那国祖納と同様に先島全体の中で西方にあり、中舌母音 *i* の歴史的に衰退・消滅したところに位置づけられる。

これらのことから西表租納の一般拍の対応は次のようにまとめることができる。

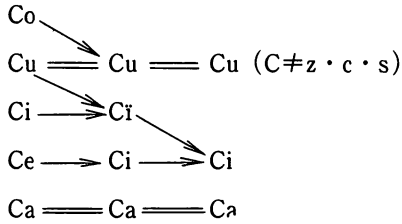


ただし、本土方言の $/zu \cdot cu \cdot su/$ は西表租納においてはこのようにウ段音に対応せず、それぞれ次の語例の示すように $/zi \cdot ci \cdot si/$ のイ段音に対応している。

ʔiridgin (入墨) ʔfiki (月) ʔifi (煤) 注2)

このことは、西表租納などロ) の3母音基調の方言においても、石垣などのイ) の4母音基調の方言と同様に $/zu \cdot cu \cdot su/$ と $/zi \cdot ci \cdot si/$ とが $/zi \cdot ci \cdot si/$ の中舌母音拍に統合し、そののち中舌母音の衰退・消滅とともに $/zi \cdot ci \cdot si/$ へとさらに変化していったことを物語っている。

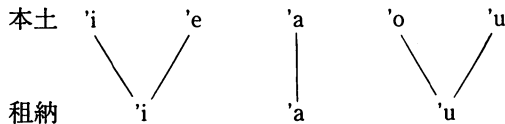
これらのことから、西表租納方言の一般拍についての音変化の歴史の概観を想定すると次のように示すことができる。



上記のような音変化の概略を想定しつつ、以下に西表租納方言の音対応とその音変化の歴史を子細に検討する。

2. 個別拍の対応

(1) 本土方言のア行音とは次のような対応関係を示す。



本土の $/i \cdot e/$ は $/i/$ に統合している。

ʔifi (石) ʔiki (息) ʔinutʃi (命) kaina (腕) daiku (大工) nagai (願い)

ʔi: (絵) ʔipi (海老) pai (蠅) ʔui (上)

また本土の $/i/$ が $/e \cdot u/$ に、 $/e/$ が $/ju/$ に対応する例も見られる。

ʔe:ha: (烏賊) ʔumu (芋) juda (枝)

本土の $/a/$ はそのまま $/a/$ に対応している。

ʔadza (ほくろ<痣>) ʔadʒi (味) ʔasai (浅い) ʔafidza (下駄<足駄>)

本土の /'o・'u/ は /'u/ に統合している。

ʔutʃitwā (弟) ʔuja (親) ʔuru (織る) ʔuki (桶) ʔumuti (顔<面>) ʔukiru (起きる) ʔubusaru (重い) ʔutu (音) ʔui (泳ぐ) ʔumukutu (知恵<思ふ事>) ʔuji (牛・臼) ʔudi (腕) ʔukiru (受ける)

また本土の /'u/ が語頭において /N/ に対応している例も見られる。

mma (馬) mmai (うまい)

(2) 本土方言のヤ行音とは次のような対応を示す。

本土	'ja	'jo	'ju
		/	/
租納	'ja		'ju

本土の /'ja/ はそのまま /'ja/ に対応している。

jamana (山) jaʔu (焼く) jamiru (痛い<病める>) ja: (家) jamatu (日本<大和>) ʔuja (親)

本土の /'jo・'ju/ は /'ju/ に統合している。

ju:ʃi (四つ) juki (斧<よき>) jumu (読む) jumi (嫁) ju: (湯) maju (眉) juru (夜) juri (百合)

(3) 本土方言のワ行音とは次のような対応を示す。

本土	'wi	'we	'wa	'wo
	/	/		
租納		bi	ba	bu

本土の /'wi・'we/ (歴史的仮名遣いでウィ・ウェで表記される) はバ行の /bi/ に統合している。

bi: (蘭) biru (座る<ゐる>・酔う<あう>) bi:munu (毒<あい物>)

本土の /'wa/ はバ行の /ba/ に対応している。

ba: (私の<我>) bada (腹<わた>・綿) bana (毘) baharija: (分家<分かれ家>) bassu (煮る<沸かす>) baro: (笑う)

本土の /'wo/ (歴史的仮名遣いでヲを表記される) はバ行の /bu/ に対応している。

buriru (折れる) bunu (斧) bu: (居る<をる>・麻糸<を>・尾<を>) butu (夫) buifa: (甥および姪<甥子>) buduri (踊り) buā (伯・叔母) butʃa: (伯・叔父)

以上のように語頭を中心に本土のワ行音はバ行音に対応するが、語中においてもバ行音と対応している例も見られる。このことから、先島方言音韻の歴史過程において、本土方言と同様に想定しうるハ行転呼(後述)とは異なった時期に、この /'w/ → /b/ の音変化

が起こったものと考えなければならない。

ʔubiru (植えくゑ) ʔfaban (茶碗) ʃiba (心配<世話>) aboʃfiduru (青い)
少数であるがパ行に対応せずにワ行・ア行になっている例もある。

wan (椀) kui (声<こゑ>)

また、語的に /'ju・'u/ などに対応している例もある。

ʔiju (魚<いを>) ʔugamu (拝む<をがむ>)

(4) 本土方言のハ行音とは次のような対応を示す。

本土	hi	he	ha	ho	hu	hja
	\	/				
租納		pi	pa	pu	hu	pja

本土の /hi・he/ はパ行の /pi/ に統合している。

pini (髭) pikusai (低い) pitu (人) pititʃi (一つ) pidari (左) pi: (火・
尻) pira (唐鋏<へら>) pinto (返事<返答>)

本土の /ha/ はパ行の /pa/ に対応している。

pa: (歯・葉) pai (蠅・灰・足<はぎ>) pari (針) paʃi (橋・箸) pana
(花・鼻) paku (箱)

本土の /ho/ は /pu/ に対応している。

pusu (臍<ほそ>) puʃi (星) putugi (仏) puni (骨) puru (掘る)

また本土の /ho/ が /po/ に対応している語例もある。

po: (穂・帆)

本土の /hu/ はそのまま /hu/ と対応している。

fukuru (袋) funi (船) futatʃi (二つ) fukai (深い) fuku (吹く) futa
(蓋)

また本土の /hi・ho/ に対応している例も見られる。

fute (額) fuka (外<ほか>)

本土の /hja/ は /pja/ に対応している。

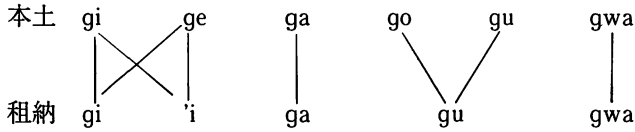
pja:gu (百)

語頭のハ行音がパ行音と対応していることは、琉球方言の全般にわたって観察されること
であり、このことは日本語のハ行音の上代以前の古態をとどめているものと考えられる。ま
た語中にハ行に相当する音が見いだされないことは、琉球方言においても本土方言と同様に
ハ行転呼がなんらかの段階で起こったことを示唆している。

ハ行音においてオ段とウ段が統合せずに、それぞれ /pu/ [pu] と /hu/ [fu] のよう
に子音において対立をとどめているのは先島方言全般の特徴となっている。これは、p → h
の変化が他の母音よりも u 母音の前において先行していたことを物語っていると考えられ

る。

(5) 本土方言のガ行音とは次のような対応を示す。



本土の/gi・ge/は/gi/に統合していることが多い。

ʔoggi (扇) dʒoggi (定規) naggiru (投げる) maggiru (曲げる) kyoggin (芝居<狂言>) dzaburapagi (禿頭)

また本土の/gi・ge/の子音が語中で脱落して/i/に対応している例を見られる。

pai (足<はぎ>) kanirui (釘<金釘>) kai (影)

これらの他に本土の/gi/が/N/に、/ge/が/ni/に対応している例もある。

mun (麦) pini (髭) ʔaçiru (上げる)

本土の/ga/はそのまま/ga/に対応している。

gandzu: (頑丈) kagan (鏡) nigai (願い) pingan (彼岸) kugani (黄金)

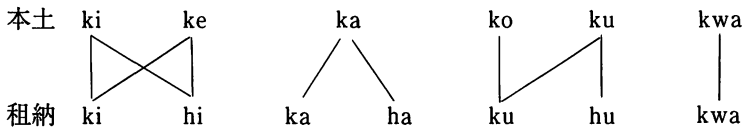
本土の/go・gu/は/gu/に統合している。

gundzu: (五十) guḡwatʃi (五月) gufo: (後生) dʒuḡguja (十五夜) jigutu (仕事) doggu (道具)

本土の合拗音/gwa/はそのまま/gwa/に対応している。

sogwatʃi (正月) nigwatʃi (二月) sagwatʃi (三月) figwatʃi (四月) guḡwatʃi (五月)

(6) 本土方言のカ行音とは次のような対応を示す。



本土の/ki・ke/は/ki/に対応していることが多い。

ki: (木・毛) ʔiki (息) kisu (着る・切る) kinu (昨日) kitʃi (傷) kimu (肝) kibuʃi (煙) kiri (蹴る) taki (竹) ʔuki (桶) sakiru (裂ける)

一方で本土の/ki・ke/の子音が語中において摩擦音化して/hi/に対応している例も見られる。

ʔaruçi (歩き) maçi (巻き・撤き) no:çiri (鋸) ʔaçiru (開ける) maçiru (負ける)

これらの他に本土の/ki/が/si/に対応している例もある。

ʃiku (聞く) ʃikariru (聞かれる)

本土の/ka/はそのまま/ka/に対応していることが多い。

kata (肩) katsu (鯉) kami (亀) kadzi (風) paka (墓) takai (高い)
 一方で本土の /ka/ の子音が語中において摩擦音化して /ha/ に対応している例も見られる。

noha (糠) ?ahari (明るい) ?e:ha: (烏賊) ?ahaffiduru (赤い) ?ahamami (小豆)
 naha (中) baharija: (分家<分かれ家>)

本土の /ko/ は /ku/ に対応している。

ku: (粉・漕ぐ) kui (声) kukunufji (九つ) tuku (床) kujine (腰) kukuru (心)

本土の /ku/ は、/ku/ に対応してオ段と統合しているものと、/hu/ に対応して対立をとどめているものに分かれる。

kuruma (車) kungwatji (九月) kundzu: (九十) fukuru (袋) pikusai (低い)
 daiku (大工) rukungwatji (六月) fukuriru (膨れる) niku (肉) <以上 ku に対応>

fufi (櫛) futji (口) fusa (草) fufiri (葉) fusai (臭い) fubi (首)
 fumu (雲・蜘蛛・汲む) fusariru (腐る<腐れる>) jafu (厄・焼く) kanifui (釘<金釘>) <以上 hu に対応>

このことに関して、加治工真市氏の述べているように、当該拍に後続する音が有声のものは ku に、無声のものは hu にそれぞれ対応する傾向が認められる。しかしながら氏も述べておられるようにその例外も多い(加治工1987)。歴史的に考えれば、k → h の音変化が o・u 統合の前に始まっており、o 母音よりも u 母音の前において先行して音変化が進みつつあることを物語っていると考えられる。

本土の合拗音 /kwa/ はそのまま /kwa/ に対応する。

kwan (棺) kwafi (菓子)

これらの他に、k が語中において有声化して g に対応している例がみられる。

?ifinage (石垣<地名>) putugi (仏像<仏>) garafi (烏) gumai (小さい<こまい>)
 pja:gu (百)

(7) 本土方言のダ行音とは次のような対応を示す。

本土	de	da	do
租納	di	da	du

本土の /de・da・do/ はそれぞれ /di・da・du/ に対応している。

?udi (腕) ?idiru (出る) sudi (袖) fudi (筆) dai (机<台>) daiku (大工)
 pidari (左) juda (枝) duru (泥) buduri (踊り) mudufji (戻す)
 jadu (戸<家戸>)

また本土の /da/ の子音が破擦音化して /za/ に対応している例も見られる。

?afidza (下駄<足駄>)

(8) 本土方言のタ行音は次のような対応を示す。

本土	te	ta	to
租納	ti	ta	to

本土の /te・ta・to/ はそれぞれ /ti・ta・tu/ に対応している。

ti: (手) tin (天) tindzo (天井) ?umuti (顔<面>) tani (種) taku (蛸)

?ita (板) futa (薄) tufi (年) tubu (飛ぶ) pitu (人) kutufi (今年)

また本土の /te/ の子音が破擦音化して /ci/ に対応している例も見られる。

tjiru (照る)

この他に、t が語中において有声化して d に対応している例がみられる。

bada (腹<わた>) tanabada (七夕) tfado: (茶湯)

(9) 本土方言のザ行音は次のような対応を示す。

本土	zi	ze	zu	za	zo	zju
租納	zi	ci	ci	za	zu	zju

本土の /zi・ze/ および /zu/ は /zi/ に統合していることが多い。このことは前述したように、イ段の /zi/ とウ段 /zu/ がいったん中舌の /zi/ に統合した後、あらためてエ段対応の /zi/ (← /ze/) と統合するという歴史的過程を物語っている。

dzi (字) d3ina (地) ?adzi (味) dzimami (落花生<地豆>) kadzi (風)

d3in (銭・膳) ?irid3in (入墨)

また本土の /zi・zu/ の子音が無声化して /ci/ に対応している例がみられる。

tutji (妻<刀自>) pittji (肘) pat3imaru (始まる) sotji (掃除) d3ot3ji (上手) kitji (傷) tit3imi (鼓) mimintji (みみず) sakat3iki (杯)

本土方言においては、音韻において四つ仮名の区別をとどめてはいないが、西表租納 (のみならず琉球方言一般) にもこの区別は認められない。これは、本土方言から琉球方言が分岐するかなり古い時点ですでに失われていた可能性を示唆している。

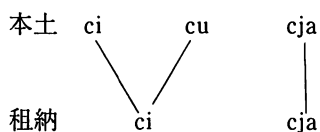
tund3i: (冬至<とうじ>) ko:d3i (麴<かうち>) kat3ji (数<かず>) mit3ji (水<みづ>)

本土の /za・zo・zju/ はそれぞれ /za・zu・zju/ に対応している。

dza: (部屋<座>) ?adza (ほくろ<痣>) kudzu (去年<こぞ>) midzu (溝)

d3uŋguja (十五夜) gund3u: (五十)

(10) 本土方言のツァ行音は次のような対応を示す。



本土の/ci/および/cu/は/ci/に統合している。このこのは前述したように/ci/と/cu/がいったん中舌の/ci/に統合した後にあらためて/ci/に変化するという歴史的過程を物語っている。

tʃi: (皿) tʃikasai (近い) katatʃi (形) ʔinutʃi (命) mutʃi (餅) tʃina (網)
 tʃinu (角) tʃimi (爪) matʃiki (松<松木>) pititʃi (一つ) ʃumutʃi (本<書物>)

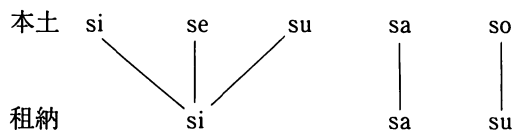
また本土の/ci・cu/が/zi・si・ti/などに対応する例も見られる。

pa:dʒi (蜂) ʃitunta (早朝<つとめて>) ʔaʃitsai (厚い・暑い) titʃimi (鼓)

本土の/cja/はそのまま/cja/に対応している。

tʃa: (茶) tʃado: (茶湯) tʃaban (茶碗)

(11) 本土方言のサ行音は次のような対応を示す。



本土の/si・se・su/は/su/に統合している。このことは前述したようにイ段の/si/とウ段の/su/がいったん中舌の/si/に統合した後に、あらためてエ段対応の/si/ (←/se/) と統合するという歴史的過程を物語っている。

ʃima (島) ʃitara (下) ʔiʃi (石) ʔuʃi (牛・臼) muʃi (虫) paʃi (橋・箸)
 ʃitʃi (節祭り<節>) ʃiba (心配<世話>) ʃinʃi: (先生) ʔaʃi (汗) sanʃin
 (三味線) miʃija (店屋) ʃi: (巢) ʃiʃi (煤) ʃini (脛) ʃina (砂) ʃuʃiri
 (薬) garaʃi (烏)

本土の/sa・so/は/sa・su/に対応している。

sara (皿) sata (砂糖) sagwatʃi (三月) saki (先) sakiru (裂ける)
 tʃikasa (女性司祭者<司>) sudi (袖) sun (損) suba (側) sumi (染める)
 misu (味噌)

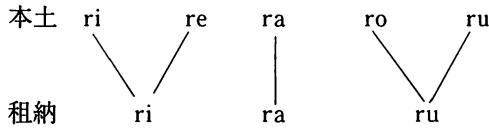
また本土の/so/が/si/に、/su/が/su/に対応する例もある。

siku (底) su:sai (酸っぱい) sumi (墨)

本土の/sja・sjo・sju/については次の語例が得られた。

ʔisa (医者) ʃumutʃi (本<書物>) guʃi (神酒<御酒>)

(12) 本土方言のラ行音は次のような対応を示す。



本土の／ri・re／は／ri／に対応している。

pari (針) juri (百合) pidari (左) kandari (雷) pituri (一人) kuri (これ) buriru (折れる) bariru (割れる) pariru (晴れる・腫れる) kariru (枯れる) nariru (慣れる)

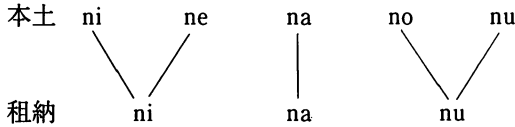
本土の／ra／はそのまま／ra／に対応している。

kara (瓦) tara (俵) mo:ra (枕) tfikara (力) ?abura (油) karai (辛い)

本土の／ro・ru／は／ru／に対応している。

rukuggwatji (六月) fukuru (袋) ?iru (色) duru (泥) muru (皆<諸>) ko:ru (香炉) jiru (汁) taru (樽) karusai (軽い) kuruma (車) juru (夜) ?aruFu (歩く)

(13) 本土方言のナ行音は次のような対応を示す。



本土の／ni・ne／は／ni／に統合している。

ni: (荷) nibisai (遅い<鈍い>) niku (肉) nifi (北<西>) niggwatji (二月) nigai (願い) nibari (根) funi (船) muni (胸) ?ini (稲) puni (骨) pani (羽)

また本土の／ni／の子音が脱落して／i／に対応している例がみられる。

?igai (苦い) ?ui (鬼) kai (蟹)

本土の／na／はそのまま／na／に対応している。

na: (名) nan (波) nabi (鍋) pana (鼻・花) tfina (網) kanasai (可愛い<かなしい>)

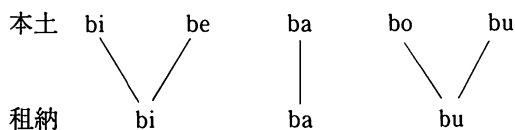
本土の／no・nu／は／nu／に統合している。

nunu (布) nun (蚤・鑿) numu (飲む) nukuri (残る) munu (物) kukunutji (九つ) nu: (縫う) nuru (塗る) ?inu (犬) jinu (死ぬ) kinu (着物<きぬ>)

本土の／nu／が／ni・no／に対応する例もある。

nifituri (盗人) noha (糠)

(14) 本土方言のバ行音は次のように対応する。



本土方言の/bi・be/は/bi/に統合している。

tabi (旅) kabi (紙) fubi (首) dabi (葬式<荼毘>) tubiiju (飛び魚) jubi
(昨夜<ゆうべ>) nabi (鍋)

本土方言の/ba/はそのまま/ba/に対応している。

basa (芭蕉) tanabada (七夕) suba (側)

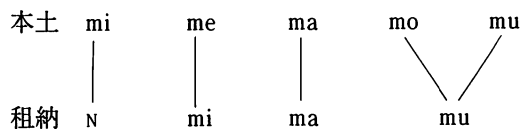
本土方言の/bo・bu/は/bu/に統合している。

ʃi:bu (歳暮) bun (盆) kubu (昆布) ʔabura (油) nimbutʃi (念仏)

またこの他に、bが無声化してpに対応している例も見られる。

ʔipi (海老) tʃipa (唾) tʃipu (壺)

(15) 本土方言のマ行音は次のような対応を示す。



本土で語末に現れる/mi/は/N/に対応しているものが多い。

kagan (鏡) min (耳) ssan (虱) nun (蚤・鑿) ʔan (網) nan (波)
pasan (鋏) ʔiridʒin (入墨) tatan (畳) kan (神) kun (古見<地名>)

語末の/mi/でも/N/になっていないもの、語末以外の/mi/でも/N/になっているものなどの例外も見られる。

titʃimi (鼓) sumi (墨) sanʃin (三味線) kandari (雷)

また/me・mo/などが/N/に対応している例もある。

ʃitunta (早朝<つとめて>) muntara (腿)

本土の/me/および語末以外の/mi/は/mi/に統合している。

mi: (実) mimintʃi (みみず) miru (見る) mitʃina (道) mitʃi (三つ) misu
(味噌) mintʃi (目) mami (豆) tʃimi (爪) ʔami (雨) jumi (嫁) kami
(亀)

本土の/ma/はそのまま/ma/に対応している。

mami (豆) maju (眉) maggiru (曲げる) maʃu (巻く・撤く) mma (馬)
patʃimaru (始まる)

本土の/mo・mu/は/mu/に統合している。

muntara (腿) mutsu (持つ) mutʃi (餅) muduʃi (戻す) kimu (肝) pimu
(紐) muni (胸) muʃi (虫) mun (麦) mussu (筵) muku (婿)

これらの他に、m が b に対応している例がいくつか見られる。

bira (蕪くみら) kabi (紙) ?ubusaru (重い) kibufi (煙)

3. 拍連続の対応

(1) 本土の /Ce'i · Cu'i/ の拍連続は /Ci (R) / に対応している。

ji:bu (歳暮) jinfi: (先生) ji:mi (清明) dzu:ji: (雑炊)

(2) 本土の /Ca'i · Ca'e/ の音連続 (歴史的仮名遣いでアシ・アヘ・アキなどを含む) は、加治工真市氏の報告にもあるように (加治工1987)、西表租納方言においては融合せずに /Ca'i/ に対応するのが一般的である。

daiku (大工) ?usai (ご馳走<御菜>) mai (稲<米>) dai (机<台>) kaina (腕) nigai (願い) nai (地震<なる>) maitta (前) kaiji (返す)

但し、例外としていくつかの語において /ca'i/ → /Ce (R) / の融合例を見いだすことができる。

pe:ru (入る) pe:ri:ʔufi (入口) ?akine: (商い) tekku (太鼓) sune (租納<地名>) ʔute (額)

また /Ca'i/ → /Cja (R) / の融合例もある。

tarja (たらい) ?i:pja: (位牌)

この他に /Cage · Cake/ → /Ce (R) / の融合例も見られる。このことは /g · k/ → /'/ のように子音が語的に脱落し、そののち母音連続が融合したことを示している。

ʔiferu (精米する<しらげる>) pate: (畑)

連母音の融合以外にも、イ段で終わる名詞に助詞ア /'a/ がついた場合の形態変化でエ段が認められる。

take: (竹は) kadze: (風は) pine: (髭は) ?ufe: (牛は)

(3) 本土の /Ca'wa · Caga/ の拍連続は /Ca (R) / に対応するのが一般的である。このことは /'w · g/ → /'/ のような子音の脱落が語的に認められることを示している。また /Ca'wa/ の拍連続は歴史的仮名遣いではアハに相当し、租納を含めて琉球方言全般にもハ行転呼が歴史的に存在したことを物語っている。

?a: (粟) ta:ra (俵) ka: (皮) ka:su (売る<買わせる>) kara (瓦) jarai (柔らかい) na:hai (長い) ?ari (東<上がり>) jamami (山亀)

(4) 本土の /Ca'u · Ca'o/ の拍連続は /Co (R) / に対応するのが一般的である。また /Ca'u · Ca'o/ の拍連続は歴史的仮各遣いではアウ・アフ・アヲ・アホに相当し、ここでもハ行転呼の存在を物語っている。

po:dza (包丁) ko:dʒi (麴) mundo: (口喧嘩<問答>) to: (中国<唐>) tfado: (茶湯) ko:ru (香炉) doggu (道具) pinto (返事<返答>) ?oggi (扇)

poki (箒) sotji (掃除) funora (船浦<地名>) so: (竿) no:ru (直る)

同様に/Cja'u/の拍連続も/Cjo (R) /または/Co (R) /に対応している。

dzo:tji (上手) gufo: (後生) dzoto (良い<上等>) dzoggi (定規) kjoggin
(芝居<狂言>) kundzo: (根性) so:ru (盆<精霊>) tindzo (天井)
songwatji (正月)

また/Ca'u・Cja'u/が/Cu (R) /に対応する例も見られる。

sokku: (焼香) bandzuggani (曲げ尺<万匠金>)

この他に/Cagu・Caku・Coko/→/CoR/の融合例も見られる。このことは/g・k/→/ /のように子音が語的に脱落し、そののち母音連続が融合したことを示している。

junun (与那国) tabo (煙草) mo:ra (枕) no:çiri (鋸)

連母音の融合以外にも、ウ段で終わる名詞に助詞ア/'a/がついた場合の形態変化でオ段が認められる。

firo: (汁は) doggo: (道具は) daiko: (大工は) buno: (斧は)

(5) 本土の/Co'u・Cjo'u/の拍連続(歴史的仮名遣いでオフも含む)は/Cu (R) /に対応するのが一般的である。

tundzi: (冬至) kinu (昨日) ?umukutu (知恵<思う事>) gandzu (頑丈)^{注3)}

同様に/Ce'u・Ce'o/の拍連続(歴史的仮名遣いではエフ・エヲを含む)も/Cju (R) /に対応している。

kju (今日) mju:tu (夫婦くめをと)

また/Co'u/が/Co (R) /対応する例も見られる。

dzoto (良い<上等>) ninto (年頭) bo: (棒)

(6) 本土の/CVma・CVba/の拍連続は、鼻母音音素/ã/を含む/Cã (R) /に対応しているものがある^{注4)}。

patuã~patwã (鳩間<地名>) buwã~buã (伯・叔母) dzirã: (ジラバ<歌謡の一種>)

また租納で生物や物品が小さな事を表すときの指小辞表現にしばしば/ã/が現れるが、これも次のように/gama/という形態が音変化を被ったものと考えられる。

/-gama/→/-'ama/→/ -ã (R) /

このように指小辞/ -ã (R) /が付かない姿と付いた姿の対応は次の通りである。

bada (隅) → badã (隅っこ) ?inu (犬) → ?inwã (子犬) ?iju (魚) → ?ijwã (小魚)
kaburi (こうもり) → kaburjã (小さなこうもり) mufi (虫) → mufã: (小虫)
tjimi (爪) → tjimjã (小さな爪) kai (影) → kajã (小さな影)^{注5)}

(7) 本土の/CirV・CurV/の拍連続は、第二拍目の/r/が第一拍目の子音の影響で摩擦子音に対応している例がみられる。

pisa (手の平<平>) fisoʃʃiduru (白い)

また上記の子音変化の起こった上に第一拍目が促音化している姿に対応しているものも多く見られる。

ssan (風・知らぬ) mussu (筵) ʃʃe:ru (精白する<しらげる>) ʃʃa (白髪)
bafʃiki: (忘れる) ʃʃan (降らぬ) ʃʃoʃʃiduru (黒い) mikkwa (盲人)

更に上記の子音変化・促音化の上で第一拍目の促音が脱落した姿に対応しているものも見られる。

ʃʃo:sa~ho:sa (暗い) ʃʃa: (鞍) ʃʃujima (黒鳥<地名>)

(8) 本土で語中の /g・z/ の子音の前に撥音が挿入されていることが多い。中でも /g/ の前に現れることが多い。これらは本土の高知方言や東北方言などに、あるいはコリヤードなど一部のキリシタン資料に見られるのと同様の前鼻音が租納方言でもかつて存在し、それが拍として固定化したものと考えられる。またこれらの子音と同じく有声で破裂の要素を持っているにも関わらず /d・b/ の子音の前ではこのような撥音の挿入は見いだすことができなかつた^{注6)}。

ʔoggi (扇) dzoggi (定規) kjoggin (芝居<狂言>) maggiru (曲げる)
naggiru (投げる) kuggatana (小刀) dzugguja (十五夜) doggu (道具)
songwatʃi (正月) niggwatʃi (二月) pigguan (彼岸) tundʒi: (冬至) gundʒu:
(五十) kundʒu: (九十)

また /k・c/ のような対応する無声子音の前にも撥音に対応している例がみられる。これは、有声子音の前で前鼻音が生じ撥音として固定化した後に子音が無声化したのではないかと考えられる。

bandʒukani (曲げ尺<万匠金>) ʔintʃikai (短い) mimintʃi (みみず)

4. 音 変 化

以上の個別拍・拍連続の対応の記述を通して、西表租納方言の歴史の中で想定される顕著な音変化について項目化すると次の諸点をまとめることができる(具体的語例は省略する。)

1) 母音について

- (1) /' / → /i / → /i /
- (2) /e / → /i /
- (3) /o / → /u /
- (4) /u / → /i / → /i / (但し z・c・s の後ろにおいてのみ)

2) 子音について

(1) 破裂音化の傾向

/w / → /b / (/wi・we / → /bi / /wa / → /ba / /wo / → /bu /)

/m/→/b/ (/mi/→/bi//mo/→bu//mu/→/bu/)

(2) 摩擦音化の傾向

/k/→/h/ (/ki·ke/→/hi//ka/→/ha//ku/→hu/)

/p/→/h/ (/po/→/hu/)

(3) 無声化の傾向

/z/→/c/ (/zi·zu/→/ci/)

/b/→/p/ (/bi/→/pi//ba/→/pa//bo/→/pu/)

(4) 脱落の傾向

/'w/→/' (/wa/→/'a/)

/g/→/' (/ge·ga·go/→/'i·'a·'u/)

/k/→/' (/ke·ko·ku/→/'i·'u/)

3) 拍連続について

(1) /Ce'i·Cu'i/→Ci (R) /

(2) /Ca'i·Ca'e·Cage·Cake/→/Ce (R) /の傾向 (一般的には融合しないが語的にこの傾向が認められる。)

(3) /Ca'wa·Caga/→/Ca (R) /の傾向

(4) /Ca'u·Ca'o·Cagu·Cako·Caku·Coko/→/Co (R) /の傾向

また/Cja'u/→/Cjo (R) /の傾向

(5) /Co'u·Cjo'u/→/Cu (R) /の傾向。

また/Ce'u·Ce'o/→/Cju (R) /の傾向。

(6) /CVma·CVba/→/Cā (R) /の傾向。

(7) /CirV·CurV/→/qCV/の傾向。

(8) /-g·-z/→/-Ng·-Nz/の傾向。

これらの項目の音変化がなんらかの有機的な順序で生じた結果、現在の西表租納方言の音韻の姿が形作られるに至ったと考えられる。

注1) 筆者の調査のほかに平山・大島・中本1966・同1967・法政大学沖縄文化研究所1977・加治工1982・中本1976などを参考にして作成した。

注2) 本論において代表的な対応語例を音声記号で表示するが、その際に音声記号であることを示すかぎ[・・・]は省略した。また、当方言ではアクセントの条件によって、[paŋi] (羽) などのように無声子音に続く母音が無声化され、さらにその後続く有声子音も無声化される一般的な傾向があるが、このような無声化も語例表記の際には省略した。また用言を語例としてあげるときには、語幹部のみを対応の資料として

扱っている。活用は必ずしも終止形をあげてはいない。語末や摩擦音の前の撥音は印刷の便宜上 *n* で表す。

注3) 「がんじょう」にはガンデウ・ガンデフ・ガンヂャウ・ガンジョウなどの仮名表記が諸文献に認められるが、『日葡辞書』に *Gangiōna* とあることを参考にした。

注4) 第一拍目が母音の場合は /C(w)ā (R) / となる。また第一拍目がイ母音の場合は /Cjā (R) / に融合するだろうことが後述の指小辞の付いた語例から推測される。

注5) これらの他にも指小辞表現は多く、そのほとんどは ?irjā: (鱗) pabirwā: (蝶) などのように必ず常に指小辞をともなった形で現れる。fā: (子ども) という語形も、buiFa: (甥・姪<甥子>) Fa: murja (子守) のように複合形態中に現れる場合は鼻音化していないことから、指小辞の付いた形態であると考えられる。

注6) 加治工真市氏によれば小浜方言においてはこの傾向は一層顕著であり、/g・z/ のみならず /d/ の前にも撥音が現れている。(加治工1982)

ご多用中貴重な時間をさいて話者としてご協力下さいました波照間マエツ氏・那根弘氏・宮良全作氏・西表全助氏の各位と、調査に際して便宜をお計らい下さいました竹富町教育委員会の皆様に心よりお礼を申し上げます。

[参考文献]

- 平山輝男編著 1983 『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』
 平山輝男編著 1988 『南琉球の方言基礎語彙』
 平山輝男・中本正智 1964 『琉球与那国方言の研究』
 平山輝男・大島一郎・中本正智 1966 『琉球方言の総合的研究』
 平山輝男・大島一郎・中本正智 1967 『琉球先島方言の総合的研究』
 法政大学沖縄文化研究所編 1977 『琉球の方言 宮古大神島』
 加治工真市 1980 「与那国方言の史的研究」(『黒潮の民族・文化・言語』)
 加治工真市 1982 「琉球、小浜方言の音韻研究序説」(『琉球の言語と文化』)
 加治工真市 1984 「八重山方言概説」(『講座方言学10 沖縄・奄美の方言』)
 加治工真市 1987 「八重山方言の比較音韻論序説」(『琉球方言論叢』)
 松本克己 1986 「通時的にみたことばの記述」(『応用言語学講座』2)
 中本正智 1976 『琉球方言音韻の研究』

(岩手大学教育学部)